

15

## 明治中期以前の東京（帝国）大学医学教育 カリキュラムにみる“ドイツ医学”の変容

逢見 憲一

国立保健医療科学院生涯健康研究部

**【背景・目的】**1970年代に中川米造、神谷昭典、石田純郎などが、日本の医学教育システムはプロシア（オランダ）の軍医学校に起源をもち、特徴として、全教科必修、医学哲学・医学概論・医史学の軽視、基礎医学特に解剖学の重視、外科の重視、臨床実習の軽視、などを有し、これらは第二次大戦後にも引き継がれている、と主張した。本研究はその検証と検討を目的とした。

**【方法】**明治期中期以前の東京大学・帝国大学医科大学、および同時期のプロシア陸軍軍医学校の医学教育カリキュラムから、(1) 教養・基礎医学・臨床医学の時間配分、(2) 内科と外科の位置づけ、(3) 講義・臨床講義・外来臨床講義の時間配分、を比較検討した。

**【資料】**東京大学・帝国大学医科大学：小関 恒雄。明治六、七年度東京大学医学部学科表（資料）。日本医史学雑誌。29(4) 1983。東京大学医学部第四～第七年報。帝国大学一覽 明治十九年。

プロシア陸軍軍医学校：神谷昭典。日本近代医学の定立。医療図書出版社 1984。

**【結果】**1. 教養・基礎医学・臨床医学の時間配分：1875年のプロシア陸軍軍医学校では全5,880時間中教養科目は760時間、約13%に過ぎなかったのに対し、明治7-8（1874-75）年の東京大学では全2,920時間中920時間、約33%が教養科目であり、10年後の帝国大学では入学前に3年間の高等学校教育を求めるまでになっていた。また、プロシア陸軍軍医学校では内科に相当する科目が840時間、外科のそれが1,020時間だったのに対し、明治9-10（1876-77）年の東京大学では各々640時間、520時間、明治19-20（1886-87）年の帝国大学では各々736時間、866時間であった。

2. 内科と外科の位置づけ：明治8（1875）年「文部省第三年報」の「東京医学学校課程表」には、「内科総論」「外科総論」「外科各論」の科目名がみられたが、「内科各論」はみられず、かわりに「病理各論」がみられた。同様に、明治10（1877）年の「東京大学医学部年報 第4年報」「本科学科表」には、「外科総論」「外科各論」はみられたが、「内科総論」「内科各論」はみられず、「ベルツ氏」の「病理総論」「病理各論」の科目名がみられた。一方、同年報「通学生学科表」には、「外科通論」「外科各論」とともに「内科通論」「内科各論」の科目名もみられた。

3. 講義・臨床講義・外来臨床講義の時間配分：1875年のプロシア陸軍軍医学校では、臨床医学のカリキュラム全2,920時間中、講義は760時間、約26%に過ぎず、臨床講義（Klinik）が1,940時間、約66%を占めていた。明治7-8（1874-75）年の東京大学では、臨床医学全1,000時間中、講義が64%を占め、臨床講義と外来臨床講義の合計は300時間、30%であった。明治12-13（1879-80）年には臨床医学全2,380時間中、臨床講義と外来臨床講義は計1,320時間、約55%となっていた。明治19-20（1886-87）年の帝国大学では、臨床医学全2,744時間中、講義は937時間、34%であり、臨床講義と外来臨床講義の合計が1,732時間、約64%となっていた。

**【考察】**わが国の明治期中期以前の一連の医学教育カリキュラムでは、一貫して教養科目を重視する傾向がみられた。また、プロシア陸軍軍医学校と比較して、基礎医学や外科を特に重視する傾向もみられなかった。19世紀後半のドイツでは“内科”に相当する科目を“病理”としており、わが国でも当初は同様の科目構成であったが、わが国独自にカリキュラムを編成できる場面では“内科”としての構成を企図していたと考えられた。臨床医学についても、帝国大学医科大学設立の時期には、臨床講義と外来臨床講義の合計の比重がプロシア陸軍軍医学校に匹敵するまでになっていた。

以上を勘案すると、わが国の医学教育は比較的早い時期に、教養重視、内科と外科の等置、臨床講義と外来臨床講義による臨床実習の重視、という形で、わが国独自の医学教育モデルを、いわゆる“ドイツ医学”として形成していたものと考えられる。